

般若経における誓願説

岸 一 英

- 一 問題の所在
- 二 小品系の誓願説
- 三 大品系の誓願説
- 四 大般若初会の誓願説
- 五 結語

一 問題の所在

般若経に説くところは大乘仏教思想の根幹である無上正等菩提を前提とする菩薩道の展開であり、特に般若経においてはその展開の中心部分を無自性空を内容とする般若波羅蜜と、実践道としてのその般若波羅蜜を含めた六波羅蜜を中心にして説かれるものである。しかし、般若経研究という場合には前者の無自性空という立場からの研究が重点を占めており、尨大な般若経の内容を画一的な見方によって眺められてきているように思われるのである。

したがって、ここでは後者の般若経に説かれる実践道の面から、菩薩の誓願というテーマをとりあげ、般若経そのものの發達を踏まえ、さらにその思想内容の發達なり変遷を考察していきたいと思う。

般若経の中に説かれる誓願説としての小品系の五願説、あるいは大品系の三十願説などについてはすでにその内容はよく知られているけれども、その取り上げ方は浄土教思想という観点からのものであって、般若経そのものの發達なり思想の展開としての観点からの考察は未だ完全になされていないのである。たしかに、大品系における菩薩の三十にわたる誓願の内容は阿闍世なり阿弥陀仏などを説く浄土教經典とのつながりを無視することはできないけれども、般若経そのものの中における位置付けがなされなければならないであろうし、さらにこれが大般若初会の中にどのようにして受け継がれていくのであるかという点についても考察されねばならないであろう。結論から先というならば、小品系・大品系・大般若初会における誓願の内容は小品系のもが大品系に増広・拡大され、大般若初会に説かれる三十一願は大品系をほとんどそのまま踏襲しているのであって、その内容の思想的發展はほとんどみることとはできない。しかし、大般若初会に大品系とは異なる点、たとえばあらゆる考えられる限りの法数の導入が行なわれていることは考慮にいれないのである。すなわち、そこに盛りこまれる法数そのものは大乘仏教のみに説かれるものだけでなく、般若経に先立つ阿含経などに説かれる法数をそのまま取り入れるという体裁をとっているのである。こういう点は般若経全体の成長の歴史という観点からの考察を加えねばならないである。

また、般若経に説かれる誓願に対する記述は以上のようないわば本願に対比せられるような内容だけではなく、無上正等菩提を得んと努力する自行の完成に対する誓願から、さらに利他行を背景とする淨仏国土思想からの誓願へという内容を含んで展開しているのである。浄土教的な立場からはこの淨仏国土思想をそのまま般若経における

本願説であると考えられているけれども、性急に浄土教思想と結びつけてしまうだけでなく、もう少し広い意味において、般若経の中における利他行の展開という観点から、般若経の成長過程の中で扱えられるべきであると考えるのである。

以上のような観点から、般若経と呼称される經典群すなわち大般若経十六会のうち種々雑多な内容をもつとされる雑部般若経を除いた初会より第五会にいたる般若経とそれぞれの異訳とを中心にして、そこに説かれる誓願説に對する般若経の立場を明らかにしていきたい。

大般若初会より五会にいたる内容は、すでに知られている通り、初会には十万頌般若が相当し、第二会、第三会には二万五千頌般若・一万八千頌般若が相当して大品系とされ、第四会・第五会には八千頌般若・四千頌般若が相当するとされ小品系としてまとめられている。初会には異訳がないけれども、大品系・小品系の般若経には各時代の異訳があることによって、梵本の内容の変化をある程度跡づけることが可能となっているのである。このことは特に般若経經典の中で最も成立の古いとされる小品系般若経の場合には、小品系とされる八千頌梵本の説かれる増広の形式すなわち繰り返しや法数の羅列などの形式が二万五千頌や一万八千頌梵本と差異の認められない部分が出てくるので、一層各異訳の比較によって、その内容を確かめていかなばならないと考えられるのである。したがって、小品系・大品系の内容を指摘する場合には、その最も古い翻訳である『道行経』『放光経』の内容をあげ、さらにその異訳間の異同を確かめなければならないのである。

小品系・大品系あるいは大般若初会の成立の時期については、大乘仏教の成立ともからんで諸説が出されているが、大よその年代として、コンゼによって次のような説が出されている。^②

(一) B.C100～A.D100 原始般若経を含めて、根本テキストがつくられた時期

(二) A.D100～A.D300 根本テキストが拡大された時期

すなわち、小品系・大品系の成立順序に関しては、現在では小品系そのものが先行することはほとんど決定的とみなされており、(一)の時代に小品系テキストの成立を考え、(二)の時代に、大品系からさらに大般若初会に相当するテキストが増大・拡大されてできあがっていったものであらうとされるのである。

したがって、本論においては、小品系般若経にあらわれる最初期の誓願に対する記述をまず取りあげて、小品系内部での翻訳時期による異同を考察し、さらにそれが大品系・大般若初会にどのように受け継がれ発展されていったかという流れを明らかにしていきたいと考える。

二 小品系の誓願説

「大乘」の宣言は、「大乘」という言葉を意識的に用いたか、あるいはその言葉を用いずとも無意識のうちにその思想内容を保有していたかという点は別にして、現在伝えられるあらゆる経典の中で、文獻的に最初にその語が用いられるようになったのは小品系般若経においてであることはすでに定説化されている。こういう意味において、「大乘」の精神をはじめて成文化したものが小品系般若経であって、それに先行する大乘経典の存否の問題は別にしても「大乘」という意識を確立し、「大乘心」を発すことをもって、般若経における菩薩の誓願の第一歩であることが知られるのである。したがって、般若経における菩薩の誓願説の出発は大乘の宣言と同じ位置に置かれるべきものと考えられるのである。大乘を宣言するということと同じ位置に置くということは、『道行経』道行品において、菩薩の善知識について語るところで次のように説かれている。

須菩提白_レ仏言 何所菩薩善師 何行從知_レ之 仏言 其人尊_ニ重摩訶般若波羅蜜_ニ 稍稍教人令_ニ学成_ヲ 教語_ニ

魔事^ニ令^レ覺知^ニ令^レ護^レ魔^③ 是故菩薩善師也

すなわち、菩薩の善知識とは般若波羅蜜を学ばしめ、それを成就せしめる人であって、さらにそれに伴なうさまざまな障害を語ってそれを克服するように教える人のことであることを説いているのである。この箇所においては、道行品の内容よりみる場合、「摩訶般若波羅蜜を尊重し、また尊重せしめる」ことが大乘利他思想の宣言に結びつくとしても、未だその意は尽されていないというべきであろう。

しかし、この道行品の内容に相当する『小品經』および『仏母經』の内容をみることによって、その意味するところが満たされ、大乘心を発し、また発さしめることが菩薩の誓願の第一歩であることが知られるのである。

〈小品經〉

世尊 何等為^ニ菩薩善知識^ニ 若教令^レ学^ニ般若波羅蜜^ニ 為說^ニ魔事^ニ說^ニ魔過惡^ニ令^レ知^ニ魔事魔過惡^ニ已教令^ニ遠離^ニ須菩提 是名^ニ發^ニ大乘心^ニ大莊嚴菩薩摩訶薩善知識^④

〈仏母經〉

何名^ニ菩薩善知識^ニ 仏言 若於^ニ般若波羅蜜多^ニ 自所^ニ宣說^ニ轉教^ニ他人^ニ復為^ニ他人^ニ広^ニ示魔業及魔過失^ニ 勸令^ニ覺^ニ一覺已復令^ニ遠離^ニ又復勸令^レ不^レ離^ニ諸仏^ニ 須菩提当^レ知 是人被^ニ大乘鎧^ニ大乘莊嚴安^ニ住大乘^ニ 是為^ニ菩薩摩訶薩善知識^⑤

すなわち、道行品と同一の箇所である『小品經』あるいは『仏母經』の説くところは、先に述べられた「般若波羅蜜を学ばしめ、さらに魔の障害を説いてそれを遠離せしめる」ことが「發大乘心」あるいは「被大乘鎧」の菩薩であることが明示されるのである。『小品經』『仏母經』において道行品の内容が發展されたのとみることができるけれども、ここにおいて大乘の内容が「般若波羅蜜を学ばしめ、魔事を遠離せしめる」という発願を意味していると

いってよいと考えるのである。

さらに正覚へと導いていこうという誓いは般若経の中では次のように説かれる。

仏言 菩薩摩訶薩心念_ニ如是_一 我当_レ度_下不可計阿僧祇人_ニ悉令_中般泥洹_上 如是悉般泥洹 是法無不般泥洹 一人也
……(中略)……須菩提言 菩薩摩訶薩度_ニ不可計阿僧祇人_ニ悉令_ニ般泥洹_一 無不般泥洹 一人也 菩薩聞_レ是不_レ恐
不_レ畏不_レ患不_レ捨去_レ就_ニ余道_一 知_ニ是則為_ニ摩訶僧那僧涅_一⑥

無量の衆生を正覚に導いていかねばならないことを決断し、そして正覚に導いたとしても実際には、正覚に導く人も導びかれるものも本来からは実在しないものであって、それはたとえば、魔術師が魔術によってたくさんの人を現出してみせ、さらにそれらの人々を消し去ったとして、その場合、誰かが死んだり傷ついたりすることがなく、本来実在しないもののごとくであることを説くのである。そして、無量の衆生に導くと決断し、努力することによってすべてを正覚に導いたとしても誰一人として導びかれた者が存在しないという教えに對して、恐れず退転しないのが、「摩訶僧那僧涅」の菩薩であるとするのである。

いまあげた「心念_ニ如是_一 我当_レ度_下不可計阿僧祇人_ニ悉令_中般泥洹_上」をさらに敷衍して定型化したものとして、菩薩の一般願としての四弘誓願の原型となったものではないかと指摘されている四句の誓願をとりあげることができるのである。

諸未度者悉当_レ度_レ之 諸未脱者悉当_レ脱_レ之 諸恐怖者悉当_レ安_レ之 諸未般泥洹者悉皆当_レ令_ニ般泥洹_一⑧

未だ度せざる者を悉く度し、脱せざる者を脱せしめ、恐怖ある者は安んじ、般泥洹しない者は般泥洹せしむという四句の内容は、先にあげた「我当_レ度_下不可計阿僧祇人_ニ」の大乗利他思想の宣言をそのままに含めた、簡単ではあるが四句という形式にまとめられた組織的な表現であるといえる。また、四句といっても「度、脱、安」という

内容は「般泥洹」と同一なのであるから、「度・断・学・証」として知られる四弘誓願とは直接的な結びつきは考えにくいと思われる。すなわち、この場合には、すでに指摘されている通り、最初の一句を利他に配し、残りの三句を菩薩の自行に属せしめる点で大きく異なっているのである。「度・断・学・証」の形式で知られる四弘誓が自行利他の双方にわたる内容を四句の形式でまとめあげるために先行する經典の説を引用したとしても、そこには思想的発展を経由しているといえるのである。つまり、利他のみの四句から自行利他の四句へという表現的には同一視される内容が、意味の上からは大きく変化しているのである。『法華経』葉草喻品や『菩薩瓔珞本業経』に出る四句の内容も『道行経』と同じく利他に約される四句のみがあげられているのである。この意味では、四句の根柢を般若経のこの部分に求めることは妥当であるといつてよいと考えられる。しかし、利他と自行との両方にこの四句を関与せよとする努力は別の形で般若経の中においてなされているのである。つまり、『大明度経』においては『道行経』と同じく、

諸未度者吾当度之 恐怖者吾当安隱之 諸未滅度者吾当滅度之^⑫

とあって、「未脱者」に関する一句が欠けており三句という形式になっているが、その内容は利他の面からの記述だけとなっている。しかし、この部分に相応する『小品経』『第五会』『第四会』『仏母経』においては自行の面からも説く形式となっているのである。

〈小品経〉

我自得度当度未度者 我自得脱当脱未脱者 我自得安当安未安者 我自滅度当度未滅度者^⑬

〈第四会〉

我既自度生死大海 亦当精勤度未度者 我既自解生死繫縛 亦当精勤解未解者 我於種種生死恐怖 既

自安穩亦當_二精勤安_一未安者_一 我既自証_二究竟涅槃_一亦當_二精勤令_二未証者皆同証得_一⑭

つまり、『小品經』以後の諸訳と『八十頌』にいたるまでのすべての内容は「みずから彼岸に渡って有情たちを渡らせ、みずから解脱して有情たちを解脱させ、みずから安らいで有情たちを安らげ、みずから涅槃して有情たちを涅槃に導く」⑮という自行利他の両面にわたる誓願の形となっているのである。したがって、小品系般若經の内部で、『小品經』以後利他の面のみならず自行をも含めるという必然的といってもよい發展のあとをみせているのである。ともかく、この四句の内容を自行に關する内容にまで広めていったのは後世の手に依るものではないかと考えられるのであり、こういったことから、「我當_二度_二不可計阿僧祇人悉令_中般泥洹_上」⑯とあらゆる人々を正覺へと導いていこうと誓われた言葉が組織的に四句にまとめられ、さらにその内容を自行についてまで深められていったという形跡をたどることができるのである。もちろん、般若經において自行に關する記述そのものが後のものであるというのではなく、大乘利他思想の宣言を般若經の中で原点としてとらえた場合にそうなるということである。

次に、小品系般若經の諸訳のうち『大明度經』においてのみ「弘誓之鎧」として「弘誓」の語をあてている言葉がある。これは『道行經』においては「摩訶僧那僧涅 (mahāsannāhasannadha)」と音写され、その他の訳においては「発大莊嚴 (小品經)」、「被大功德鎧 (第四会)」、「被大乘鎧 (仏母經)」などと訳されている。そしてこの語は「大乘」「無生法忍」などの語とともに、この語の出る經典は大乘經典であることを示す言葉であるとされているのである。⑰

その原意を調べてみるならば「僧那 (sannaha)」も「僧涅 (sannadaha)」もともに語根 *√ nah* から派生した言語であって、意味は *tie, fasten, bind* すなわち「結ぶ、固定する」などをあらわしているものとされる。そしてその派生語としての「僧那 (sannaha)」は *tying up, girding on, forming for battle* すなわち「固く縛ること、武装

すること」の意であり、「僧涅 (sannaddha)」はその語の過去受動分詞であって 'bound or fastened or tied together, armed, mailed' などの意で「固く固定した、武装した」などと訳されるものである。現代語訳としては、「大きな鎧で武装した」あるいは「偉大な（徳の）甲冑によって身を固めている」などと訳され、厳密な意味においては「誓」といった内容は汲みとれないように思われるのである。このことは「摩訶衍三拔致 (mahāyana-sannaddha)」²⁰に對する『大明度經』の訳語が「正昇大乘」となっていて、この場合における 'sannaddha' とはかなりニュアンスの異なったものとなっているのである。つまり、『大明度經』は 'mahāsannāhasannaddha' に限つてのみ「弘誓之鎧」として「弘誓」の語をあてているのである。その部分をあげてみると次のようになっている。

善業白^レ仏 何謂^ニ弘誓之鎧^一 仏言 菩薩來已自誓 吾當^レ滅^ニ度無央數人^一 已度^ニ無量無數人民^一 皆得^ニ泥洹^一 知其法無法得滅度^ニ也…… (中略) …… 度^ニ無數人^一 為^レ無^ニ有^一 人得^ニ滅度^一 也 菩薩聞^レ 是不^レ驚不^レ怛不^ニ以^一 恐受^ニ不^レ移不^レ捨不^レ疲而無^ニ慘悴^一 是為^ニ有^ニ弘誓鎧^一 能昇^ニ大乘^一 當^ニ以^一 知^ニ此^一²¹

この部分はすでに先の大乗利他思想の宣言のところで触れたところであるが、『大明度經』のみが「自誓吾當滅度無央數人」を「弘誓鎧」としてとらえられているのである。

「弘誓鎧」については、すでにその最終的に意圖する点などについての考察がなされているので、それによって結論のみをとりあげてみるならば「大きな鎧で武装する」というのは、菩薩が無量の衆生を涅槃へと導いていく誓願を立てて、その誓願を成就するために、忍辱と精進によってその誓願を護ることを、戦場に臨む戦士が鎧によって武装することにたとえたのであるとされるのである。

したがって、この「弘誓鎧」が述べられるときには先にとりあげた箇所にもみられるように、小品系般若經においては「大乘」の語と対になって述べられて「度無央數人」の内容を、それを実践する菩薩の立場から述べたもので

あつて、それは「大乘」の語と表裏一体をなしているともみることができるのである。しかし、そこで指摘されているように「忍耐」と「精進」によって誓願を護るということは今取りあげた箇所だけでは断定することはできないけれども、誓願に対して「忍耐」と「精進」とが関わりをもつということは、小品系般若経の後の箇所で見られるところである。²³ともかく「弘誓之鎧 (mahāsannāhasannaddha)」はその訳語上は忠実ではないとしても、菩薩の誓願を示さんとした言葉であつて、誓願を表明する最初の言葉として理解すべきであり、さらにすんで、原意をこえて最初から利他を宣言する内容として用いた点にこそ意義がみとめられるべきであると考えるのである。

菩薩の一般願（総願）ともいうべき「吾当_レ滅_二度無央数人_一」の誓願が四句の形式でまとめられ、さらに特殊願（別願）としての五願が説かれるようになるのが小品系の次の段階である。しかし、これらの五つの誓願が小品系般若経の中で、一般願から導き出されてきたものとは考えにくく『阿闍世王經』との関連から出てきたものではないかと思われるのである。

五つの誓願が説かれるのは恒竭優婆夷品の後半に相当する部分であつて、内容そのものについてはすでに浄土教関係の面から触れられているので、²⁴まずその部分のみを簡潔にとりあげてみると次のようなものである。

- (一) 願我後作_レ仏時 令_下我刹中無_有禽獸道_一（無禽獸道）
- (二) 願我後作_レ仏時 令_下我刹中無_有盜賊_一（無有盜賊）
- (三) 願我後得_二阿惟三仏_一時 使_三我刹中皆有_二水漿_一令_三我刹中人悉得_二薩芸若八味水_一（八味浴池）
- (四) 我当_二精進得阿惟三仏_一 使_三我刹中終無_二穀貴_一令_三我刹中人所願所索飲食悉在_二前_一（飲食自然）
- (五) 行_二精進_一得_二阿惟三仏_一 令_下我刹中無_有惡歲疾疫者_一（無有疾疫）

そして、これらの誓願については、この誓願の記述のあとに、この品名にある恒竭優婆夷が星宿劫に金華仏とい

う名の仏になるであろうという授記談が述べられる中で、恒竭優婆夷が阿闍仏土に生れ、さらにさまざまな仏土に生れ変つてのみ仏となつたその世界には

無_レ有_二禽獸盜賊_一 無_レ有_二斷水疑若穀貴病疫者_一 ²⁷⁾

となつており、この五つの誓願に相応する内容の成就していることを述べているのである。すなわち、小品系般若經における五つの誓願とその成就したことは阿闍仏に關連したものとしてまず取りあげられているのである。つまり、この内容自体が『阿闍仏國經』の内容を予想させるものであると考えられるのである。そして實際にその部分を『阿闍仏國經』の中に見い出すことができるのである。

すなわち『阿闍仏國經』²⁸⁾においては、

阿闍如来刹中

(一)無_レ有_二三惡道_一 何等為_レ三 一者泥梨二者禽獸三者辟荔

(二)無_レ有_二牢獄拘閉之事_一 無_レ有_二衆邪異道_一

(三)其浴池中有_二八味水_一人民衆共用_レ之

(四)人民随_レ所_レ念_レ食即自然在_レ前

(五)無_レ有_二三病_一 何等為_レ三 一者風二者寒三者氣

とあり、同様に『不動如来会』においても

(一)無_二三惡趣_一 何等為_レ三 所謂地獄畜生剎魔王界

(二)無_二牢獄囚繫衆生_一 無_レ有_二外道異学之衆_一

(三)八功德水受用随_レ心

四彼土衆生所須飲食……応念而至

(四)無三種病 云何為三 謂風黃痰所起之病

となっており、小品系般若經における五願は『阿闍仏国經』及びその異訳である『不動如来会』の中に見い出せるのである。これは、従来は阿闍仏の本願の数え方それ自身についての異説があり、さらに今あげた内容の出る阿闍仏土善快品の内容を本願と考えず、たんなる諸功德のあらわれとして解釈していたことによって見落されていたのではないかと考えられるのである。つまり善快品に示される諸功德の内容が、

是為阿闍如来昔行菩薩道之所願而有持^④

という經典自身が本願の成就としての内容を語る体裁になっていることから、本願を示すものとして理解されるべきであると考えるのである。

小品系般若經における阿闍仏に關係する記述は、この誓願についての記述のところで經典みずからが『阿闍仏国經』の内容を語っていると考えられるが、さらにもう二点から引用されたものではないかということを考察してみたい。

前述のように、恒竭優婆夷が阿闍仏刹に生れ、さらにさまざまな仏土に生れかわってのち、星宿劫に金華仏になるであろうという授記談の直後における小品系般若經の主題は、

須菩薩白^レ仏言 菩薩行^ニ般若波羅蜜^一 何等為^レ入^レ空 何等為^レ守^ニ三昧^一^⑤

となっており、「般若波羅蜜を行じるとき、何を空に入るとなし、何を三昧を守るとなすのか」という問いかけにはじまり、三三昧つまり空・無相・無願三昧を主題として、それを学び、行じてもそれに墮することなく、中途で阿羅漢・辟支仏の悟りを悟ってしまうことのないことを述べていたものである。そして、この三三昧につい

ての問題が突然にあらわれるのは、この五つの誓願と恒竭優婆夷の授記談の前に、その導入部分ともいふべき表現がなされているのである。つまり

舍利弗謂^②須菩提、若有^③菩薩、有^④三種事、向^⑤三昧門、守^⑥三昧門、一者空、二者無相、三者無願、是三者有^⑦益^⑧於^⑨般若波羅蜜^⑩。

とあって、この五つの誓願と授記談との内容を取り除けば全く連絡する一貫した話題となっているといえるのである。

さらに、小品系般若経における五つの誓願それ自身の発達という観点からみると、六波羅蜜が施護訳ならびに八千頌梵本においてはじめて完全に対応させられているのであって、六波羅蜜に五願が対応させられたものでないことに注意しなければならないのである。^⑪『道行経』をみればわかるように、そこではただ「布施波羅蜜」「忍辱波羅蜜」の二波羅蜜を対応させているだけなのであって、六波羅蜜が完全に配置されるのは、漢訳においては『仏母経』と『八千頌梵本』だけなのである。すなわち、五願が般若経の中にとりいれられ、そして波羅蜜を配することによって、誓願説が般若経化されていった歴史を漢訳諸本を比較することによってうかがいえるのである。すなわち、『道行経』では、

(一) 布施行檀波羅蜜

(二) 忍辱行羼提波羅蜜

(三) 欠

(四) 精進

(五) 精進

『大明度經』では

(一) 布施行布施度無極

(二) 行忍辱度無極

(三) 欠

(四) 精進

(五) 精進

『小品經』では

(一) 檀波羅蜜

(二) 羼提波羅蜜

(三) 精進

(四) 精進

(五) 精進

『第五会』では

(一) 布施波羅蜜多

(二) 安忍波羅蜜多

(三) 欠

(四) 精進

(五) 精進

般若經における誓願説

『第四会』では

(一)布施波羅蜜多

(二)布施淨戒安忍波羅蜜多

(三)精進波羅蜜多

(四)精進

(五)精進

『仏母経』では

(一)布施波羅蜜多

(二)持戒忍辱波羅蜜多

(三)精進波羅蜜多

(四)禪定波羅蜜多

(五)智慧波羅蜜多

『八千頌』におおこた³⁴⁾

一) dānapāramitā

二) dānapāramitā, śīlapāramitā, kṣāntipāramitā

三) vīrya, vīryapāramitā

四) dhyānapāramitā

五) prajñāpāramitā

以上のように六波羅蜜に五願を対応させたのではなく、五願に順次六波羅蜜が対応させられていったものと解釈すべきなのである。この点からも五願の記述が後のものでなかったかと考えられるのである。

したがって、小品系般若経における五つの誓願説については、これらの内容は『阿闍仏国経』の中にまとめられ、またその記述の前後関係から、さらに五願の小品系般若経内における発達という三つの観点から、小品系般若経における五つの誓願説は『阿闍仏国経』の中から導き出されてきたものではないかと考えるのである。³⁵⁾

次に、これらの小品系般若経にみられる誓願の記述の中で、特に『仏母経』には他の諸訳にみられない、そういった誓願の成就した様を述べる「仏刹清浄」という言葉が各願において説かれている。しかしこの部分に相当する梵本には、この語に相当すると思われる“*buddhakṣetra-parisuddhaye*” “*buddhakṣetram parisodhayisyāmi*” という言葉が第二願と第四願に一度ずつ説かれるだけである。しかし、たとえば第一願の内容は

へたとえ猛獣どもが私を食べようとしても彼らにその施物を与えることにしよう。私の施与の完成 (*darapāra-mita*) への道は成就に向うであろう。そして、無上にして完全な悟りに私は近づくことになるうゝ私が無上にして完全な悟りをさとしたときには、仏陀としての私の教化領域 (*Buddhakṣetra*) には、動物に属する有情はどこにも、どんなものも、どんなあり方でも、けっして存在せず、知られないし、神々しい食物が享受できるように、私はそうしたい。³⁶⁾

というように、その意味するところからいえば、浄仏国土思想を表明せんとしているものといえるのである。しかし、『小品経』以前の諸訳においてはすでに述べたように「浄仏国土」あるいはそれに類する表現を見出すことすらできないのである。この点において「度衆生の利他大悲行である菩薩道」としての浄仏国土思想は、小品系において「般若空の方便道として発菩提心から成仏へのあり方を具体的に設定したもの」³⁷⁾としてはじめてその思想的

根拠を得て、盛んに唱導されるようになったと考えられるのである。^⑧ 淨仏国土思想が摩訶僧那僧涅の結論として考えられる所以もここに存すると思うのである。

ともかく、小品系般若経の中にみられる誓願説は、大乘利他思想の宣言が菩薩の誓願として把えられて「摩訶僧那僧涅」をうみ出し、さらに『阿闍仏国経』との関係によって、よりその誓願が具体化され、淨仏国土思想への展開として受け継がれていくことになった点に、その特色を見い出すことができるのである。これは、この五つの誓願がすぐさま大品系にいたっては「淨仏国土」という言葉をそえて増広・展開されていくことによってうかがわれるのである。

三 大品系の誓願説

大品系般若経と小品系般若経との形式・内容両面にわたる研究はこれまで数多くなされてきている。これまでの般若経研究はこの両者の比較的研究であって、この両者の新古を決定することに主力が注がれてきたといつてよいであろう。事実このことが決定されないことには般若経に説かれる思想の推移が決定されないのである。しかし、この問題は前述のように、小品系を先とし、それを土台として大品系がつくられていったとされ、形式の面からは次のような相違が指摘されている。^⑨

I 大品類は小品類の最初の一品を二十数品に増大した点

II 大品類は小品類の終りから第三品の前に約二十品を加えた点

つまりこの二点にのみ相違が認められるのみであって、その他の部分は分量の増広や、そこに説かれる思想の発展などはみられるとしても、説かれる主題や順序は一致しているのである。この点はこれまで作成されている内容

比較表によっても確かめられる。^④

したがって、小品系における誓願説として、先の小品系の中で説かれた五つの誓願に相当する部分と、小品系には相当箇所のない部分と、さらに小品系の最初の一品が二十数品に拡大された部分とにおける誓願をあらわす内容をとりあげてみていきたいと思います。

小品系にみられた五つの誓願はまず小品系にいたって数の上からは三十の誓願として拡大されているのである。

この部分は前述のように、前後の主題も一致しており体裁としては全く小品系のもが増広されたことが知られるのである。内容そのものは、小品系のもと同様、すでに先学によって触れられているので、『放光經』によつてその要約のみを列挙すれば次のようなものである。^④

(1) 資具自然

↓(四) 飲食自然

(2) 無犯十惡 無有好醜

(3) 慈心無害

↓(二) 無有盜賊

(4) 精進無怠

(5) 無有乱志

(6) 無有邪見

(7) 無邪定聚

(8) 無三惡趣

↓(一) 無禽獸道

(9) 地平如掌

(10) 黄金為地

(11) 無有愛欲

(12) 無有四姓

(13) 生家無別

(14) 悉皆一色

(15) 國中無王

(16) 修行道品

(17) 等一化生

(18) 得五神通

国人光明

(19) 無有便利

(20) 無有歲月

(21) 国人長寿

(22) 三十二相

(23) 具足善本

(24) 無有病苦

(25) 無有二乘

(26) 無增上慢

↓
(25) 無有疾疫

(27) 寿命無量

光明無量
声聞無數

(28) 国土广大

(29) (生死解脱)

『放光經』をはじめとする小品系諸訳においてはこの誓願が述べられる前後の内容は小品系のものと同じであつて、分量の増加にともなつて新しい品区分がなされている点を除けば全く一致している。したがつて、小品系の内容はあるいは形式と異なつた点についていくつか触れていきたい。

まず第一にこれらの誓願が小品系のものにおいては、世尊が舍利弗に語りかける形式になっているのに対し、小品系にいたつてはそれらが一樣に須菩提に対して説きかけるといふ形式になっているのである。どのような理由によつて小品系におけるものと小品系におけるものとの間にそのような変更がもたらされたのかは疑問であるが、おそらく小品系と小品系との經典の伝持者の相違によるのではないかと考えられる。

第二は願数の問題である。『放光經』においては「我得^三阿耨多羅三耶三菩阿惟三仏^二時 使我境界」といふ形式で述べられる願の数は前記のように二十九となっている。しかし、『放光經』以外の諸訳においては、⁽⁴⁸⁾得五神通・国人光明が二願にひらかれているので、形式の面では三十願ということになるのである。ところが最後の願については、その願意が不明であるという理由によつて、これまでは願に数えないとされている。⁽⁴⁹⁾しかし、これは『大智度論』のみに依つた考え方であり、『放光經』をはじめ、『第二會』『第三會』においても願文として述べられており、『大品經』において誓願としては疑問視された内容が、それ以後の翻譯である『第二會』『第三會』においても『放光經』の説くところに沿つた内容となっているのであるから、最後のものも願文としてみてかまわないと考えるのである。しかし願数そのものにこだわる必要は全くなく、願数のみによつて系列を考えることは無意味なのである。すなわち、この部分の小品系を三十願と固定的にみることも当を得ていないように考えられるのである。同じ大品系に入る『第三會』においては、さらに二十七願と二十八願との間に「遠離執著」の願が説かれているの

である。すなわち、

我仏土中諸有情類無_レ如是等種種執着^⑤

という他の大品系のものには見られない一願が増えているのである。したがって、願数それ自体にこだわることは無意味であって、その内容の面からの考察が必要であると考えられるのである。

第三には、小品系にみられた各願に六波羅蜜を対配させていた点が、大品系においては最初から整った形をとっている点である。小品系においては前述のごとく、各願に六波羅蜜を配当させていく過程に時間的な推移を感じさせたのであるが、大品系にいたっては、最初の六願については、布施から般若にいたる六波羅蜜を順次に配当し、それ以後の願についてはすべて六波羅蜜全部を行じる時の願として説かれているのである。このことは、大品系の梵本においては最初からそのような対配がなされていたということを意味するのであるから、小品系の五願が大品系の三十願に増広されたとする考え方とは矛盾するものであり、少なくとも各波羅蜜に対配させることについては小品系のもので大品系のものから影響を受けたと見る方が自然であると考えられるのである。

第四には、これらの誓願が大品系においては、「浄仏国土」という言葉でもって表わされる点である。前述したように、小品系においては大品系と全く同等な内容をもつ誓願、すなわち「浄仏国土」思想を内容とする表現があるにもかかわらず、『八千頌』においては、*‘buddhaśeṭṭha-pariśuddhi’*などの語が最初から存在していたとは考えられないということは、このような誓願説が「浄仏国土」思想の確立に寄与したと考えるのもよいと思われるのである。大品系のこの誓願説に相当する梵本テキストはまだ出版されていないが、小品系に相当する部分のないところの『一万八千頌』においては、「どのようにして仏国土を浄めるのか」という部分は

kathaṃ buddhaśeṭṭhaṃ pariśodhayati?^⑥

のようになってゐるから、どちらにして小品系において見られない表現といえるのである。また一方では、この小品系によつてはじめて創唱されるにいたつた「淨仏国土」思想については「放光般若等はむしろ他方淨土説に對立して淨仏国土を唱導したのではないかと考えられる」とされるように、特に西方淨土説を意識した新しい主張であつたと考えられるのである。

このことは第五として、嚴密には小品系の五願が小品系の三十願へと受け継がれて拡大されたのではなく、誓願説の形式だけを受け継いで内容は他の源泉から導き出されたものではないかと考えられるのである。すなわち、五願に三十願に相当すると思われるものに配していつた場合、(一)無有盜賊を第二・第三の願文に對比すること自体に無理があるし、(四)八味浴池にいたつては、それに相當する願文を見い出すことができないのである。また(一)無有禽獸の願が(8)無三惡趣の願に發展させられたとしても、そのような發展を考慮するならば、五願そのものをすべて小品系が含んでゐるべきである。もし五願から三十願へと増えていつたものであるならば、五願すべてを含んでおり、なおかつ五願になつた内容が附加されることの方が自然であると考えられるのである。このような意味において、單に小品系と小品系の誓願説の形式の一致の上から、五願からそのまま三十願へと拡大されていつたとするのではなく、形式を踏襲しながら、誓願説の内容は他の源泉から導き出されてきたものであると考えた方がよいと思われるのである。

小品系においては誓願説としてまとめて説かれるところは以上の他に、小品系には相當部分がないところの『放光經』建立品にあたる内容のところにも見い出せる。この部分では最初に自ら六波羅蜜を行ぜしめて仏国土の淨なることを求むること(自行三六波羅蜜)亦勸進人二使行三六度……与三衆生共求三仏土淨に關連して述べられ、誓願が述べられる場合には必ず六波羅蜜の全部あるいは一部を對配させているという点を繼承した表現となつてゐる。

誓願の内容の部分のみをあげれば次のような七願になっている。⁵⁰⁾

- (1) 令_レ我國其中所有尽是七宝_一（七宝嚴淨）
- (2) 令_レ我_レ仏國常有_二天樂_一（常有天樂）
- (3) 使_レ我_レ仏土常有_二天香_一（常有天香）
- (4) 我作_レ仏時諸弟子衆飲食自然百味之飯（百味飲食）
- (5) 我作_レ仏時使_レ我國人身体細滑香潔皆如_二天身_一（身体香潔）
- (6) 我作_レ仏時令_レ我國土一切衆生隨意所願五樂皆令得之（恒受快樂）
- (7) 我作_レ仏時我國衆生皆悉不_レ離_二四禪及四空定三十七品_一（不離禪定）

結論的にみてこれらの誓願は先にあげた三十の誓願と形式・内容において同等の次元に立つものとして差しつかえないと思われる。先にあげたものとの相違は、第一にはこの部分に相当する小品系の内容がないことであって、小品系に相当部分があつてそれを継承ないし増広したものではないということである。また、この七願の内容については、たとえば(4)百味飲食の願は三十願の中の(1)資具自然と同趣意のものであり、内容的には同じものとみられるのであるから、願数それ自体にこだわることは、ここでも全く無意味な事柄であると考えられる。

さらに、小品系の第一品が二十数品に拡大された部分において、「願我後得仏令我刹中」といういわゆる本願の形式にとらずに、先にあげられた誓願の内容が説かれる部分がある。この部分に相当する小品系の内容は、『道行經』によれば、⁵¹⁾

- (一) 欲_レ学_二阿羅漢法_一 当_レ聞_二般若波羅蜜_一 当_レ学_当持_当守
- (二) 欲_レ学_二辟支仏法_一 当_レ聞_二般若波羅蜜_一 当_レ学_当持_当守

(三) 欲_レ学_二菩薩法_一 当_レ聞_二般若波羅蜜_一 当_レ学_{当_レ持_{当_レ守}}

という三乗の教えを学ばんとすれば、この般若波羅蜜の教えを聞き、学び、伝持し、それを守ればよいことを述べるものであって、誓願の内容を含んだものとはなっていないのである。そしてこの箇所が大品系においては七十数条に拡大され、その中に形を変えた誓願説が説かれているのである。つまり、どのようなことを欲する場合に、般若波羅蜜を学ぶべきであるかという形式で多くの場合が説かれるのである。『放光經』によって先の誓願説と同趣の内容をひろいあげていくと次のようなものがあげられる。^⑤

(1) 菩薩摩訶薩願欲_レ令_下十方恒沙世界衆生 盲者得_レ視 聾者得_レ聴 狂者得_レ志 裸者得_レ衣 飢渴者得_中飽滿_上 当_レ学_二般若波羅蜜_一 (無根欠者 資具自然)

(2) 菩薩摩訶薩欲令十方恒沙国土其中衆生諸在罪地三惡趣者 欲令解脱皆得人身者 当_レ学_二般若波羅蜜_一 (無三惡趣)
(3) 菩薩摩訶薩願作_レ仏時 為_二無央數弟子衆_一 一時説法 便於_二座上_一 得_二阿羅漢_一 発_二菩薩意_一 者得_二阿惟越致_一 成_二阿耨多羅三耶三菩_一 無央數菩薩為増其壽命無量 其光明随_二其寿_一 不_二増減_一 当_レ学_二般若波羅蜜_一 (壽命無量、光明無量)

(4) 菩薩摩訶薩成_二阿耨多羅三耶三菩_一 時 欲_レ令_下国土無_二姪怒癡之名_一 衆生智慧悉皆得_レ等 常念_二布施_一 常念_二淨戒_一 自調自檢不_レ燒_二衆生_一 般泥洹後欲_レ使_三法無_二滅尽之名_一 学_レ学_二般若波羅蜜_一 (無姪怒癡)

(5) 菩薩摩訶薩自願得_二阿耨多羅三耶三菩_一 時 其有_下聞_二我声_一 者_上 必至_二阿耨多羅三耶三菩_一 欲_レ得_二如是者_一 当_レ学_二般若波羅蜜_一 (聞声得証)

これらの内容は小品系との対比によって、般若波羅蜜を学ぶべきことを具体的な場合にあてはめて説かれたことが知られるが、小品系の説くところでは、ただ三乗の教えがすべて般若波羅蜜におさめられるというだけの内容が

大品系にいたって、さらに具体的に示されているのである。この部分における小品系から大品系への展開を考える場合、誓願説が般若波羅蜜の修学に関係づけられ、般若波羅蜜を修学することがすなわち誓願を立てることであって、最初から誓願説の内容が般若波羅蜜の修学におさめられていることが知られるのである。また、この部分においては、「淨仏国土」という語も、それに類する表現もなされずにこういった内容が説かれるのであるから、大品系のものからみる限り、般若経においては、「淨仏国土」思想と「誓願」思想とは別々な形であらわれてきて、それが般若経の大品系のものにおいて結びつけられたのではないかと考えられるのである。

四 大般若初会の誓願説

大品系の内容が小品系のものと比較されることによって三部分、すなわち(一)小品系の最初の一品が拡大された部分、(二)小品系と大品系とが法数などの機械的に増大された部分を取り除けば一応の対応をみせる部分、さらに(三)小品系には全く対応する内容がない部分、とにわけられることはすでに述べたが、大般若経初会の構成も大品系のもと同じ構成になっている。したがって、ここでは大品系でとりあげた部分の大般若初会の対応部分を考察することによってその誓願説をみていきたいと思います。

まず(一)小品系の第一品に相当するとされる部分については、大品系において七十数種の項目に拡大されたものが大般若初会においては九十数種の項目に増広された中に見い出される。その内容はすでに先の大品系のところで示したように、般若波羅蜜を修学することの具体例を示そうとする部分に説かれるものであって、誓願がその主題となっている部分ではないのである。学観品第二の中に示される九十数項の内容はほとんど大品系のもものと一致するので構成の上からは大品系のもものが大般若初会に踏襲されたことがうかがえ、また誓願を説かんとする部分におい

でも小品系との差異を見い出すことはできないといえる。この部分については、小品系と大般若初会との相違より、小品系と小品系との相違に大きな展開がみられるといえよう。したがって、この箇所で問題とされる点は大品系においても同様に問題とされた点であるといつてよいのである。しかし、大品系のところでは、一応この部分においては五種の誓願を示そうとしているところをあげたが、この五つをさらに詳しくみてみると、「願我後作仏時令我刹中」に近い形式で説かれるものはあとの三願であつて、前の二願についてはそのような形式はとられていないのである。そしてこのことは『大般若初会』においてもこの五願の内容に相当する部分については同様の表現となっている。しかし、それ以外の増加している項目については「我於何時当得無上正等菩提我仏土中」という形式のもとで誓願を説いているのである。これはすなわち、大品系において、般若波羅蜜を学修することと誓願を立てることが結びつけられ、『大般若初会』においてさらにこの展開が徹底された表現となっているといふことができるのである。大品系の内容がひらかれ誓願説の形式で説かれるようになったものには次のようなものがあげられる。^⑤

(一) 我於_レ何時_二証_レ得無上正等覺_一已 隨_二地方_二所_二行住坐臥_一悉為_二金剛_一 (悉為金剛)

(二) 我於_レ何時_二當_レ得_二無上正等菩提_一 我仏土中諸有情類成_二就妙慧_一如_二余仏土_一 (成就妙慧)

(三) 我於_レ何時_二當_レ得_二無上正等菩提_一 我仏土中諸有情類成_二就種種功德_一 余仏土中諸菩薩成共稱讚 (成就功德)

さらに、この部分で注目すべきことは、大品系のものにおいてはじめてあらわれ、『大般若初会』にも受け継がれている誓願の内容である「壽命無量、光明無量、聞声得証」である。「壽命無量、光明無量」は大品系の三十願についての部分において、『放光經』では第二七願に出る内容である。しかし、「聞声得証」すなわち「私の声(名)を聞く者は必ず無上正等菩提を得るようにしたい」といふ誓願はその中に見い出せない。これまでにおいて大品系の三十願説は『無量寿經』の原初形態より影響を受けたとされているが、小品系から大品系へと発展していく過程

において「聞声（名）得証」の思想が取り入れられていくことによっても、大品系以後の般若經の誓願説は『無量壽經』の原初形態から影響を受けたといえるのではないかと思われる。

(二) 小品系と大品系とが一致する部分における誓願説というのは、小品系の五誓願と大品系の三十誓願とが説かれる部分に対応する所に説かれるものであり、『大般若初会』においては願行品第五一に三十一願が数えられる。^{⑤)} 内容的には大品系のもので一致して、繰り返しや法数を羅列することを除けば新しい思想的な展開はみることではない。したがって『大般若初会』は構成の上からも、内容の上からも大品系を受け継いでいることがこの箇所からもうかがえるのであるが、さらに、大品系の諸訳の中でもこの部分に関する限りは『一万八千頌般若』に相当するとされる『第三会』に最も近いものといえる。すなわち、『第三会』では他の大品系においてみられなかった「遠離執着の願」が『大般若初会』においては受け継がれているのである。

その他、大品系のところで取りあげた、この内容の対告者についての点、各波羅蜜を誓願に對配する点、「淨仏国土」としての立場からの誓願である点、などは全く大品系のもので受け継いでいるので、これらについては問題とする所は見い出せないといえよう。

(三) 小品系に對應部分がなく大品系になって増加された新しい部分に對應する『大般若初会』の誓願説は大品系に新たに説かれた七願を含めてただ機械的に増広されているだけのものといえる。嚴淨仏土品第七二において、『放光經』で説かれた七願の中、最後の「四禪及び四空定・三十七品を離れしめないようにしたい」という内容が、ただ機械的に解剖されて、次のような誓願にひらかれているのである。

当_レ得_二無上正等覺_一時令_二我刹中有情類_一^{⑥)}

(七) 不_レ遠_二離十八空_一

(ハ)不_レ遠_ニ離四念住乃至八聖道支_一

(ニ)不_レ遠_ニ離四聖諦_一

(ホ)不_レ遠_ニ離四靜慮四無量四無色定_一

(ヘ)不_レ遠_ニ離八解脫乃至十遍処_一

(ト)不_レ遠_ニ離陀羅尼三摩地門_一

(チ)不_レ遠_ニ離三解脫門_一

(リ)不_レ遠_ニ離極喜地乃至法雲地_一

(ロ)不_レ遠_ニ離五眼六神通_一

(ヲ)不_レ遠_ニ離仏十力乃至十八不共法_一

(ウ)不_レ遠_ニ離三十二大士相八十随好_一

(エ)不_レ遠_ニ離無忘失法恒住捨性_一

(オ)不_レ遠_ニ離一切智道相智一切相智_一

(カ)不_レ遠_ニ離一切菩薩摩訶薩行諸仏無上正等菩提_一

このような機械的な羅列は思想的には何の展開をも示していないといえるけれども、般若経がぼう大な分量へと成長していく過程を端的に示す好例であるといえよう。しかし、一面このような機械的な増広は明確な内容をぼやけさせるものであり、小品系から大品系へと順次に展開していった般若経における菩薩の特殊願としての性格からいえば、ここにみられるような修行徳目の羅列は特殊願として展開してきたものを逆に一般願の内容へと近づけるものであって、この意味からは思想的には退行しているといってもよいと思われるのである。

五 結 語

以上、般若經に説かれる誓願説を小品系・小品系・大般若初会の順序で取りあげることによって、その展開をみていったのであるが、結論として次のような点があげられると思う。

第一に小品系の五誓願については、これは「摩訶僧那僧」^①と直接には結びつかないのではないかと一点である。「摩訶僧那僧」は直接には、小品系の内容では五誓願の部分よりも後に説かれる四句の誓願と結びつく内容であって、このような観点から五誓願の記述は後の加筆ではないかと考えられる。

第二に小品系の五願と小品系の三十願とは經典の中での位置の対応は見られるとしても内容的には前者から後者へと展開したとみるべきでなく、前者の『阿闍世王經』との関係、後者の原始『無量壽經』との関係、という二面から考えるべきであると思う。

最後に、小品系から大般若にいたる誓願の展開は小品系において「淨土國土」思想を宣揚し、そのための誓願という形で発展をおえており、小品系から小品系へが「質の発展」、小品系から大般若初会へは「量の発展」という形になっているといえよう。

註

- ① 木村泰賢『木村泰賢全集』第六卷四一八—四四七頁、望月信亨『淨土教の起源及發達』五二五—五七八頁、藤田宏達『原始淨土思想の研究』四一四—四二二頁。
 - ② E. Conze "The Prajñāparimitā Literature" p. 9
- なお、梶山雄一『般若經』(一〇四頁)では、(一)の時期を「西紀前後五〇年ころ」に訂正しておられる。

- ③ 大正八卷四二七 a
- ④ 大正八卷五三八 c
- ⑤ 大正八卷五八九 c
- ⑥ 大正八卷四二七 c
- ⑦ 藤田宏達前掲書四一六頁
- ⑧ 大正八卷四六五 c
- ⑨ 大正三卷三二五 b 『大乘本生心地觀經』
- ⑩ 望月信亨前掲書五三二頁
- ⑪ 『仏書解説大辭典』第七卷三四六—三五一頁には、この經の成立時期について、經典内部に、大般若、法華、維摩の名を出し、さらに思想的にも華嚴・涅槃の内容を常識として取り扱っている、としているのです。くなくとも小品系よりも後であることが知られる。
- ⑫ 大正八卷五〇一 a
- ⑬ 大正八卷五七五 a
- ⑭ 大正七卷八四九 a
- ⑮ U. Wogihara "Prajñāpāramitā vyākhyā" p. 830 (以下 W.) vāyam tīrṇāḥ sattvāḥ tīrayema muktā mocayema āśvāsā āśvāsayema parinirvāṇa parinirvāṇapayema.
- ⑯ W. p. 87
- ⑰ bodhisattvasya mahāsattvasyaivaṃ bhavati, aprameyā mayā sattvāḥ parinirvāṇapayitavyā iti, a-saṃkhyeyā mayā sattvāḥ parinirvāṇapayitavyā iti.
- ⑱ 平川 彰『初期大乘仏教の研究』二一九頁 靜谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』四二—三頁
- ⑲ 平川 彰『仏典Ⅰ』
- ⑳ 梶山雄一『八千頌般若Ⅰ』
- ㉑ W. p. 105

- 20 大正八卷四八〇c
- 21 望月信亨前掲書五二七頁
- 22 平川 彰『初期大乘仏教の研究』二二六頁
- 23 五願についての波羅蜜の配し方についてもうかがえる。
- 24 平川 彰前掲書二四一五頁「大誓莊嚴」が願を立てることほとんど同じ意味となる例をあげている。
- 25 註①参照
- 26 大正八卷四五七c〜八a
- 27 大正八卷四五八a
- 28 大正十卷七五五c
- 29 大正十卷一〇五b
- 30 大正十卷七五五a『不動如来会』では「此亦如来本願成就」あるいは「此皆不動如来本願之力今得成滿」となっている。
- 30 大正八卷四五八b
- 32 大正八卷四五七b
- 33 この点については、すでに望月信号前掲書五五〇頁などにおいて指摘されている。
- 34 W. pp. 738〜743
- 35 五難所との関係から出たものとする考えもされている。(梶芳光運「阿含に現われた経済観と経済圏の展開」△『結城頌寿記念論文集』所収Vなど)
- 36 梶山雄一『八千頌般若経』一五七―八頁、W. p. 739
- 37 水谷幸正『日仏年報』第三七号
- 38 望月信亨前掲書五四五頁
- 39 山田龍城『大乘仏教成立論序説』二〇六頁
- 40 椎尾弁匡『国訳一切経般若部五』、干潟龍祥「Prajāpāramitā」
- 山田龍城『梵語仏典の諸文献』など。
- 41 註①参照

- ④② 望月信亨前掲書の要約による。下段は、小品系のもの、ないし発展とされるもの。
- ④③ 望月信亨前掲書五七四―五頁
- 藤田宏達前掲書四一八頁
- ④④ 大正二五卷五九四a、「最後願義不明了今当略説」とある。
- ④⑤ 大正七卷六四四b
- ④⑥ これまでの出版は、ダット本が、(1) *Subhūti Parivartaḥ* (問觀品相当まで) 及び (2) *Antadvayavibuddhi* P. 6 一部が木村高尉氏によって出されている。(大正大学研究紀要 56・57・58 輯)
- ④⑦ 一万八千頌梵本は、コンゼによって、55章〜82章まで英訳ととまて出されている。
- ④⑧ E. Conze "The Gilgitmanuscript of *Aśṭaśaśasāstra* *prajñāpāramitā*" p. 102.
- ④⑨ 小沢勇貫『仏教論叢』創刊号三六―八頁
- ④⑩ 大正八卷一三六a―bこの部分に相当する『一万八千頌』梵本の相当部分はあるところである (E. Conze 前掲書 pp. 103―5)
- ④⑪ () 内の要約は望月信亨前掲書五七六―七頁による。
- ④⑫ 大正八卷四二六a
- ④⑬ 三枝充惠『般若經の真理』一一〇―一二六頁には七五を数えている。
- ④⑭ 大正八卷四a〜b
- ④⑮ 大正五卷一六b〜c
- ④⑯ 梵本では *nāma-dheya* となっている。
- ④⑰ Gosha "Satasahasrika *Prajñāpāramitā*" (Bibliotheca Indica No. 32 Part 1, p. 114) には次のようにある。
- punar aparaṃ Saradvatīputra bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ caratāyaṃ cittaṃ utpādayitāyaṃ kim iti me sahasravanamātreṇa nāmadheyaśya Gaṅgānadivālukopameṣu lokadhātusū sattvanīyatābhaveyur anuttarāyāṃ samyak sambodhaviṭi prajñāpāramitāyāṃ śikṣitavyam*
- ④⑱ 藤田宏達前掲書四一九頁
- ④⑲ 椎尾弁匡『国訳一切経般若部三』二五九―二七二頁の脚註に三十一願の要約名があげられている。
- ④⑳ 大正六卷一〇三七a〜一〇三八a